

第三章：孔子の生涯（１） 生誕から不惑迄

【孔子の出生 生誕日と命名、家族のことなど】

孔子は魯の陬邑（現在の山東省曲阜）で生まれました。生誕日については種々の説があり定論がありません。たとえば、「春秋」の注釈書には「春秋三伝」といって、前章で逸話を色々引用紹介した「春秋左氏伝」の他に「春秋公羊伝」「春秋穀梁伝」がありますが、この公羊・穀梁「二伝」は、孔子の生誕を紀元前五五二年とし、「史記」・孔子世家は、紀元前五五一年としています。一年間の差異があります。しかも「穀梁伝」では「冬十月庚子の日に誕生した」とあり、「公羊伝」では生月を十一月と記述しています。

近年のものでも、中国の碩学・銭穆の「孔子伝」は「史記」生年説の九月二八日生まれ、白川静「孔子伝」は「二伝」生年説の十月二日生まれ、そして諸橋轍次「如是我聞孔子伝」では、「穀梁伝」生年説に従い、周暦の十月は夏の八月だから、八月二七日生まれに当り中華民国ではそう決めている、などとなっています。

父親は叔梁紇（しゅくりょうこつ）といって、味方を救うために城門の扉を一人で支えたと伝えられる士族階級の武勇人。母親は「顔氏の女」（史記・孔子世家）で、徴在（ちようざい）という人だったらしい。白川静先生は、母親の徴在を巫女（みこ）だったのではないかと、推測されています。

この「顔氏の女」は、叔梁紇の前妻が、九女を産んだが男子を産まなかったため離縁され、その後正式に迎えられた後妻である、とする正式結婚説と、「史記」に記載された、「野合（やごう）して孔子を生む」という文章に基づく不正式結婚説があります。「野合」という言葉は、「男女が婚儀を経ずに通ずること」（広辞苑）で、現代的な言い方をすれば、「不倫」「婚前交渉」して出来た子が孔子だった、ということになります。（転じて「野合」は現代では、「政党の馴れ合いによる合体」（新明解国語辞典）の意に用いられています）

ところで、当時の身分制度は、王 諸侯 卿大夫 士族 庶民 と階級が決まっていた。「春秋左氏伝」に記載されていることが事実だとすれば、孔子の祖先は、諸侯である宋国の公子だった弗父何で、跡目相続の際、争乱を避けるため、宋侯の位を弟に譲って卿大夫に甘んじた高德の人物です。その後、謙譲の美德を備え、上卿まで出世した正考父（せいこうふ）や、大司馬（軍務大臣）を勤めたが内乱で殺害された孔父嘉（こうぼうか）などが家系を継いで、孔防叔（こうぼうしゆく）の代で魯に出奔して孔氏は遂に卿位を失い、士族になって、叔梁紇に至ったようです。これも定説となるほどの詳しいことは分かっておりません。

孔子は本名を「丘」（きゅう）、字（あざな）を「仲尼（ちゅうじ）」といます。生まれたとき、頭の天辺が窪んで丘（か）のようだったので「丘」と名づけられ、尼（じ）という山にお祈りして授かった次男坊なので「仲尼」と字（あざな）したそうです。（史記・孔子世家）

「春秋左氏伝」(桓公六年すなわち紀元前七百六年)に、魯の桓公の公子(後の莊公)が生まれたとき、桓公が名のつけ方を申繻^{しんしゅ}という者に問うた記事が載っています。それによると、「命名に五あり」として次のように答えました。「名に五あり。信あり、義あり、象あり、仮あり、類あり。信 桓公の公子・友が生時^{てのひら} 掌に友と表れていたの、友とした如く誕生時の特徴からの命名、義 徳に因んだ命名、象 似たものを名とする方法、仮 万物の名前から取る法、類 父と関係することから取る法。禁じられているのが、国名・官名・山川名・病氣名・六畜名・器物・玉帛名からの命名。官名やお祈りする山川等の名前をそれぞれ変更しなければならないし、縁起が悪いからです」と。そこで桓公は、太子が生まれた日の干支^{えと}が自分と同じだという「類」の方法から、太子に「同^{どう}」と名付けました。

申繻^{しんしゅ}の命名法によれば、孔子の「丘」は、「似たものを名とする方法」すなわち「象」で命名されたこととなります。又、孔子の息子は「鯉^り」といますが、誕生祝に当時の君主・昭公が鯉を賜ったので、それを栄として名づけたと伝えられます。そうだとすれば、これは「類」に当たります。

余談になりますが、日本の諺に「名は体を表す」とあるとおり、中国の史書を読んでいると、名に因んだ面白い事例にたくさん出くわします。たとえば、殷の紂王^{あぐらい}が悪来という寵臣を登用して政治を行わせたら、悪来が紂に他人の悪口ばかりを告げるので諸侯はいよいよ遠ざかった、という話があります。まさに「悪、来る」です。又、晉の穆公^{ぼくこう}が姜氏^{きやうし}を娶り、太子に仇^{きゆう}という名前をつけ、その弟に成師^{せいし}と名付けた。大夫の師服が予言した。「そもそも名は正しい筋道を規制し、義は以て礼を出し、礼は以て政の骨格をなし、政は以て民を正す。それゆえに政がうまくいって人民は従うのだ。今、穆公は、太子に名付けて仇といい、弟に成師という。はやくも乱を^{きざ}兆せり。兄の仇^{きゆう}は将来きつと^{すた}廢れるだろう」と。予言は的中し、分家した弟の成師の家系が隆盛になり、やがて春秋の覇者、文公(重耳)を出すことになるのです。

次に、「仲尼^{ちゆうじ}と字^{あざな}した」ということについて補足いたします。当時は「字^{あざな}」といって、「男子が成年後に実名以外に付ける別名」(広辞苑)を通称する習慣がありました。字^{あざな}は、大抵の場合、名前と関係のある文字が用いられます。たとえば、孔子は丘と尼山で共に丘や山に、孟子^{もうし}は名は軻^か、字は子輿^{しよ}で共に車に関係があります。

そして、長男に伯夷^{はく}又は孟^{もう}、次男に仲^{ちゆう}、三男に叔^{しゆく}、末っ子に季^きなどと、決められた文字が字^{あざな}に付けられました。したがって、孔子は次男坊ですから「仲尼^{ちゆうじ}」です。(前出の伯夷と叔齊^{せい}は、長男と三男であることが分かります)

尚、孔子の家族関係では、「兄と姪がいて、一男一女があった」ことが、次の「論語」の記事から明らかです。

孔子が弟子の公冶長のことを、「結婚させてよい。獄中につながれたことはあったが、^{えんざい}冤罪(ぬれぎぬ)だった」と言って、孔子の娘を娶わせた。(公冶長第五の一)

孔子が南容のことを、「国に道あればきつと用いられ、道なきときも刑死に当る罪を得ることはない男だ」と言って、孔子の兄の娘と結婚させた。（公冶長第五の二）

孔子が息子の伯魚（名は鯉）に、「お前は『詩経』の周南と召南の詩を学んだか。人としてそれらを修めなかったら、何も分からず、一步も進めないよ」と言った。（陽貨第十七の十）

【幼年期から青年時代】

「丘（孔子）生まれて叔梁紇死す」（史記・孔子世家）とあるように、父は孔子が生まれると間もなく死にます。それは三歳の時だったと、「孔子家語」（本姓解篇）にあります。

士族或は巫女であった母方の家庭の中で育って、孔子は幼い頃から祭礼に使用する俎豆（祭器一般）を並べては、儀式的まねごとをして遊んでいたといわれます。そして孔子の母も、孔子が十七歳（古説に二十四歳）になる前に亡くなってしまいます。（「史記」・孔子世家）後に聖人と呼ばれ、素王（無冠の帝王）と仰がれた孔子の幼年期は、波乱の荒海への過酷な門出でした。

貧乏士族の母子家庭で、俎豆の事を遊戯しながら、孔子はやがて少年期を迎えます。その頃どんな暮らしぶりをして成長したのかは、残念ながら文献がないので分かりませんが、少年期からそれ以降の生涯を、十歳ごとに区切り、孔子自身が自分の人生を振り返って述懐した有名な言葉が、「論語」・為政篇に載っています。そのあたりから、想像を逞しく働かせて、孔子の生涯を辿っていくことにいたしましょう。

子曰わく、吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順がう。七十にして心の欲する所に従いて、矩を踰えず。（為政第二の四）

（先生が言われるには、私は十五歳で学問に志し、三十歳で自立し、四十歳であれこれ迷わず、五十歳で天命なるものを知った。六十歳で人の話が素直に聞かれ、七十歳になった今では、心の思うままにやって、それが自然と道を外れないようになった、と）

よく知られた文章なので、既に皆さんもご承知だと思います。現在でもこの章を典故（典拠となる故事）として、十五歳のことを「志学」、三十歳を「而立」、四十歳を「不惑」、五十歳を「知命」、六十歳を「耳順」、七十歳を「從心」と言っています。

さて、孔子はこの述懐にあるように、十五歳で学問を志しました。一体何の学問を志したのでしょうか。錢穆先生の「孔子伝」（アジア問題研究会版）によれば、「当時の士族家庭は、多く礼楽射御書数の六芸を学んで、身を立て生活を謀る方途とした。これが所謂儒業

である」とし、「儒業を修めてそれを教授できる儒（者）は主として貴族階級に仕えて穀禄を得ていた」と、述べておられます。「吾れ十有五にして学に志す」。十五歳になった孔子も、「六芸」の研究を志したに相違ありません。

「六芸」を大雑把にいえば、礼は冠・婚・葬・祭その他広義の儀礼を総称しますが、主として宮廷を中心にして執り行われる祭礼等の儀式に守られるべき規範やマナーで、当時「礼儀（礼の大綱は）三百、威儀（礼の節目は）参千」といわれるほど詳細に決められていました。それを執り行うこと。

楽は音楽、主に宮廷での礼楽演奏。楽は「礼楽」と合わせ呼ばれるように、礼と密接にかかわる、人格修養面で欠かせない重要科目で、孔子自らも好んで楽を学び、歌い、演奏しました。後ほど孔子の壮年期を述べる時にその傾倒ぶりを紹介します。

射・御は弓を射ることと馬車を操縦することで、当時の男子の必須の教養。子罕篇に、ある村の人が、孔子は博学多識なのにこれといった専門家としての名声がない、大物だね。偉大なものだ、と言うのを聞いて、孔子は弟子たちに、「専門家か、そうだねえ、じゃあ御者でいこうか、射でいこうか。うん、御者でいこう」と、おどけた場面が載っています。

又、八佾編に、「弓の礼では的にあたる・あたらないは問題外だ。それぞれの能力には力量差があるのだから」とか、「君子は争うことをしないが射だけは別だ。でもお互いがキチンと挨拶を交わしあい、負けた者が罰杯を受ける決まりはいかにも君子的だ」と孔子の射に関する考えを伺える記事があります。

書は「書経」のことで、後ほど別項を設けて詳しく述べます。数は算術。「礼記」(内則篇)と言う書物に、庶民でも「六歳で数と方角の名を教え」「十歳で外部の先生に就いて読み書き・計算を学ぶ」とあります。読み書きそろばんは万世万国共通の基礎教育科目です。

この中で、孔子が最も重要視したと思われるのが、「礼」と「書」、そして礼と不即不離(ぴったりくっついて離れないこと)の関係にある「詩」です。孔子の「吾れ十有五にして学に志す」とは、「礼」「書」「詩」のプロを目指すことにあった、といってよいと思います。

【周の礼の研究】

先ず「礼」についてですが、「夏王朝」「殷王朝」にも、それぞれ独自の法律や諸制度から風俗・習慣にいたる一定の規範、すなわち「礼」の制度があって、周公がそれらを参考にして、「周王朝」の礼楽制度を完成させたといわれています。若い孔子も、儒者として、周公の定めた礼制度の事跡をなぞることから研究の道に入ったのではなかろうか。

弟子の子張が「十代先の王朝のことを知ることができますか」と訊いた。先生が言われるには、「殷は夏の諸制度を受け継いでいて、廃止したり加えたりした跡を知ることができる。周もやはり殷の諸制度を受け継いでいて、廃止したりつけ加えたりしている跡を知ることができる。だから周の後を継ぐものがあれば、たとい百代先でも分

かるわけだ』と。(為政第二の二十三)

先生が言われるには、「夏の礼について私は話すことができるが、その子孫の杞の国については証拠が不足しているので話せない。殷についても同様に、殷の礼は話せるが、子孫の宋の国については証拠不足でダメだ。文献(文書と賢人)が不足しているからだ』と。(八佾第三の九)

先生が言われるには、「周の文化は、夏・殷に鑑みて(参考にして)、いかにも郁々乎として華やかで立派だ。私は周に従おう』と。(八佾第三の十四)

うら若き少年・孔子は、母国・魯の始祖である賢人宰相・周公のことを人づてに聞き、或は「詩経」や「書経」がまだ整備されていない状態での古文書などを通じてその事跡を知って、夢に見るほど周公に憧れた。そして、夏・殷の文化を総合し、最も優れたレベルにまで高めたとされる、周公が制定された礼儀三百威儀三千の礼の諸制度を、自分も悉く学んで身に付け、それを社会の中樞を担う若者や政治を司る貴族階級の人々に教授してみたい。孔子はそう志したのではなからうか。

「礼」は又、発祥の根源を探ると、当時是とされた人倫(人の常道)に基づく階級制度・家族制度の「秩序」を体系化したもので、所謂「父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり」(「孟子」・滕文公篇)の「五倫」が根底にあります。

早熟の少年・孔子もそれを希求したのでしょう、「社会秩序を守り、人が人の道を行って和を保つには、『君主は君主らしく、臣下は臣下らしく、父は父らしく、子は子らしく』(顔淵篇)それぞれがそれぞれの役割・使命を果たす社会であらねばならない、それが「礼」を重視する所以で、君主に代わって国家老や陪臣たちが権勢を誇り、子が親を弑す昨今の魯国の乱れは「礼」の欠如にある。開祖・周公の御世を復古して、魯を道のある国家に戻すべく貢献してみたい』と。

では、青雲の志を抱いた孔子は、誰から礼の手ほどきを受けたのでしょうか。孔子の先生は誰か。「子張篇」にヒントとなる記事が載っています。

衛の大夫の公孫朝が孔子の弟子の子貢に、「孔子は誰に学問を学んだのか」と訊いた。子貢が対えて曰わく、「文王・武王の道はまだ地に墜ちずに人に残っています。賢者はその重要なことを覚えているし、そうでない者でも幾許かは覚えています。文王・武王の道はどこにでもあります。うちの先生には常師(一定の先生)などおられなかった。すべての場所、すべての人が先生の師でした』と。「子張第十九の二十二」

「礼記」(内則篇)に「男子は十三歳で音楽を学び、詩を朗読し、勺の曲を舞う。成童(十五歳)になると象の曲を舞い、射・御を学ぶ。二十歳で初めて礼を学ぶ」とあり、又、南宋の朱子という大学者が著した「大学章句序」に、「古代では、八歳になると王公より以下

庶民に至る子供たちは小学に入り、六芸を学び、十五歳になると公・卿・大夫・皇太子そして庶民のなかで優秀な者は皆な大学で修己治人の学問を習った」とあります。

孔子も或はそのような学校で手ほどきを受けたかも知れませんが、後には独学で文献（書籍や礼に詳しい人）を探しながら、或は過去の遺風の残る地域に出かけては情報を集め、各王朝の諸制度を比較損益するやりかたで勉強したに相違ありません。「春秋左氏伝」に、孔子が二十七歳の頃、^{たんし}郷子（郷国の国の君主？）が魯に来朝し、昭公が彼に官制のことについて色々学んだ。それを聞き知った孔子が郷子に見えそれを学んだ、という記事がありますが、孔子はこのようにあらゆる機会を捉えては礼の研究に没頭したのでしょう。

その研究ぶりは徹底していて、何事も疎かにしない毅然としたもので、分からないことがあれば、外聞を捨てても、「子、^{たいびょう}大廟に入りて、事ごとに問う（先生は、^{たいびょう}大廟の中で儀礼を一つ一つ訊ねられた）」（八佾篇）という姿勢を貫き通しました。そして、孔子の熱心な礼の研究が人知れず広まり、二十代後半には既にそれを教授する力量と評判を得ていたようです。後の「孔子学園」にぼつぼつ弟子が増え始めます。

「論語」に登場する、魯の太夫・^{ちういし}孟懿子も、「礼は人の幹（背骨）なり、礼なければ以て立つことなし。孔丘という聖人の^{まつえい}末裔がいるからそこで学べ」という父親の遺言で、孔子に弟子入りした一人とされます。

【詩すなわち「詩経」の重視】

一方で平行して研究したのが「詩経」と「書経」でした。「詩経」というのは古代の民謡または詩人たちの秀作を集めたもので、我が国の「万葉集」に比較すべきものです。

子曰わく、詩三百、一言以てこれを蔽^{おほ}う、曰わく思い邪^{よこしま}なし。（為政第二の二）

（先生が言われるには、「詩経」の三百篇は、ただ一言でその全容を表現すれば、「心の思いに邪なし」だ、と）

「詩経」は、古代の人々の多様な観察を、或は民謡として、或は抒情詩として、或は古今の名君を称え、或は非道の統治者を風刺した中国最古の詩集です。その詩は素直でおおらかで邪心がない。孔子は、古代人の素朴な感情や民衆の心を吐露する詩を諸国から集めて学び、後にそれを編纂し、人格修養並びに外交上の必須教養として、学園の重要教材に指定しました。一例として、「論語」・学而篇にある、孔子と弟子の子貢が、富貴・貧賤に処する心構えの優劣を問答したときに引用した、「衛風・淇奥」の第一章と、二人の問答ぶりを掲げてみます。

彼の淇奥^{きいく}を瞻^みれば
緑竹猗猗^{いはい}たり

淇（川の名）の川隅^{かわぐま}を見渡せば
緑の竹草が瑞々^{みずみず}しく生い茂る

匪 ^ひ たる君子あり	ああ、輝ける武公の盛徳は
切るが如く ^す 磋 ^そ るが如く	切 ^{せつ} 磋 ^さ された学問の力とともに
琢 ^う つが如く磨 ^ま くが如し	琢 ^{たく} 磨 ^ま された人徳修養の賜物だ
瑟 ^{ひつ} たり ^{かん} 憚 ^{はん} たり	その面持ちは威厳があって
赫 ^{かく} たり ^{けん} 喧 ^{けん} たり	威儀に溢れて光り輝いている
匪 ^ひ たる君子あり	ああ、輝ける武公の盛徳は
終 ^{わす} に ^{わす} 諶 ^{しん} るべからず	愛慕して永 ^と 久 ^く に忘れられない

子貢が言うには、「貧乏でも^{へつら}諂^{てん}わず、金持ちであっても^{おご}驕^{ごう}ることがない、というのは、どうでしょう」と。子曰わく、「よろしい。だが、貧乏で道を楽しみ、金持ちであって礼を好む者には及ばない」と。そこで子貢が、「詩経」・衛風^{きいふう}の淇奥^{きいおく}に、「切^{せつ}磋^さ琢^{たく}磨^ま」と歌っているのは、まさにその事でしょうかと言うと、先生は、「それでこそ君と一緒に詩が語れる。一を聞いて二を知るのだから」と誉めた。(学而第一の十五)

「詩経」は、本来は詩そのものの持つ内容を寓意として、婉曲^{えんきよくてき}的(遠まわし)に相手に意を伝えるのが筋ですが、このように、「断章取義^{だんしょうしゅぎ}」といって、作者の本意や詩全体の元意に関係なく、詩の中で使用された言葉だけを抜き出して、自分の意見を述べるのにも活用されました。尚、孔子が弟子たちに「詩経」を学ぶメリットを説いている場面が陽貨篇にみられます。

子曰わく、「君たちはなぜ詩経を学ばないのだ。詩経は心を奮い立たせ、観察眼を養わせ、人との交際に役立ち、怨み言もうまく言わせるものだ。近いところでは父に仕え、遠くは君に仕えることができ、鳥獸草木の名前もたくさん覚えられるのに」と。(陽貨第十七の九)

「人の交際に役立ち」「遠くは君に仕えることができる」というのは、我が国にも「贈答歌」でお互いの意中を交換しあう時代があったように、当時外国との外交辞令や宴会での交歓辞令に、「詩経」の或る部分を口唱しあう儀礼があり、又、詩を雅楽で演奏したりしたので、「詩経」を暗唱するくらいは、高官たるものの常識であったからです。このように孔子が「詩経」研究を志した理由は、それが礼楽と不即不離な関係にあったのも一因だと思います。後年、孔子は人間の修養の順序を次の短い言葉で述べております。

子曰わく、詩に興り、礼に立ち、楽に成る。(泰伯第八の八)

(先生が言われるには、道徳的教養を養うには、はじめに詩を学ぶがよい。感情の発露・興奮が出発点だから。次に礼を学び、秩序や社会的規範を知りそれに則ることだ。そして最後には音楽の情操面を学び、難なく人を善化するようになれば完成だ、と)

【書すなわち「書経」の研究】

「書経」は古くはただ「書」といい、漢の時代には「尚書」、そして宋代に「書経」と呼ぶようになりました。堯・舜・禹・湯王・武王等の古代聖天子や王たち、伊尹・^{ふえつ}傅説・周公等の名宰相たちが政教を垂れた、政治上の訓戒集とでも言ったらよいでしょうか。吉川幸次郎先生の言葉を拝借すれば、「古代の王たちの演説集。つまり古代人の政治生活の記録である。」（「中国の古典」岩波文庫所収）

彼らは^{ふういん}風韻に富んだ言葉で、リーダーたる者の「帝王学」を語ります。伝説上の人物が、歴史上に実際存在したかどうかは問題でなく、統治者の理想的モデル或はあって欲しいリーダー像が「書経」にはある、ということで、この書物が尊ばれたといってよいでしょう。

「論語」・堯曰編にある、「天の曆数汝の躬に在り」^{まこと}「允にその中を執れ」^{だいりうぼ}「四海困窮せり、天禄永く終えん」などは、「書経」・大禹謨篇に出てくる言葉です。この大禹謨篇は現在の今文には無く、^{ぎこぶん}偽古文にあったとされる、舜帝が禹や^{こうよう}皋陶の功績を^ほ讃めた三部作の一つですが、含蓄に富んだ名編です。余談を以下に二つ。

孔子の時代からずっと^{くだ}降って宋及び南宋の時代(十二世紀頃)に、^{しゅうとんい}周敦頤、^{ていめいどう}程明道・^{いせん}程伊川兄弟や彼らの思想を集大成した朱子たちが新しく儒学を復興しましたが、その哲学的根拠のヒントをこの大禹謨篇の次の言葉から得ました。

「(舜帝が禹に曰わく)人心これ危うく、道心これ^{かすか}微なり。これ精、これ一に、^{まこと}允にその中を執れ、と」。

彼らは「道心」を「本然の性」、「人心」を「気質の性」と名づけ、「気質の性」は人欲で汚れた本来の性ではないので、徳を日々磨いて「本然の性」に帰れ、と主張しました。

「平成」の元号も^{だいりうぼ}大禹謨篇から採られました。すなわち、舜帝が禹の功績を賞して、「地平らぎ、天^{なんじ}成り、六府三事(陰陽五行や穀物、民生など)^{まこと}允に治まり、万世永く頼むは、これ乃(禹)の功なり」と言った言葉から「平成」の二文字を貰い、世の中が末永く太平無事に治まるように、との願いがこめられたのです。

このように「書経」は、リーダーたるべき君子が具備すべき思想や心得を説いた名言名句の宝庫です。孔子も自己の理念形成の模索過程で、「書経」の原型をなした古文書の影響を受けて、大いに触発・発奮されたに相違ありません。尚、「詩経」「書経」「春秋」それに「易経」^{らいき}「礼記」を「五経」と称して、後の儒学(孔子を始祖とした政治・道德の学)の聖典とされました。

かくして幼少時、^{そとう}俎豆(祭器一般)を並べては、儀式のまねごとをして遊んでいた孔子も、十五歳の成童ともなると、「礼」「詩」をとことん学んで貴族や士族を教授する職業で禄を食み、「書」を極めて願わくは卿大夫及び君主に用いられて理想の政治を執行してみたい、と考えるようになったのではなかろうか、というのが私の推量です。

さて、志は立ったものの、父に早世されて母子家庭で育ち、やがて母にも先立たれる若き孔子の現実の生活は、想像以上に厳しいものだったろうと思います。出仕する年頃になって得た任務は委吏^{いり}とって、米穀の出納を管理する倉庫の番人でした。次にやったのが牧場の番人です。いずれも誠意努力したので、倉に納める米穀の秤量を適切にやって信頼され、牧場の牛羊は大いに繁殖したといわれています。でも、下級の士族だったので家は貧しく、生活に益する仕事は何でもやったようです。だから何でもよく知っていました。

(子曰わく) 吾れ^{もち}試^{もち}いられず、故に芸あり。(子罕第九の七)

(先生が言われるには、私は若い頃たいした仕事には用いられなかった。だから何でもやったので下世話なことまで知っているのだ、と)

孔子が、聖天子の事跡や礼制度から下世話なことまで、とにかく博識多能なことについて、ある国の大臣が弟子の子貢に「孔子という方は聖者でしょうな。何とまあ多能なんだろう」と言ったので、子貢は得意げに、「勿論、生まれつきの大聖人ですからあのように多能なんです」と応えました。孔子はそれを聞いて「その大臣は私の本質をよく知る人だ」と、自嘲するような笑みを浮かべ、嘆息して言いました。

吾れ^{わか}少くして賤^{いや}し(身分が低かった)。故に鄙^{ひじ}事(つまらぬこと)に多能なり。君子、多ならんや。多ならざるなり。(子罕第九の六)

(私は身分が低く貧しかったから、生活のためには何でもやらねばならなかった。だからつまらぬことにも物知りなのだ。真の聖人というものは多能ではない。つまらぬことにはエネルギーを割かないものだ、と)

後に「孔子学園」でビジネスマナーを教え、諸侯に政治コンサルタントとして仕え、機会あらば執政の座に就き、理想的な政治を行ってみたいと願った孔子も、青年時代は下端役人の仕事で生計を賄いながら、コツコツと「礼」「詩」「書」を研究しながらチャンス到来を待っていたのです。

その苦しい生活の中で、「孔子家語」によれば、孔子は十九歳の時に^{けんかん}并官氏と結婚して、息子伯魚(鯉)が生まれました。先述したように、息子が生まれた時に、魯の昭公が鯉をお祝いに賜ったので、それを榮として、名前を「鯉」、字を「伯魚」とした、とも書かれています。信憑性は保証できません。

【三十而立 齊で樂を研究】

「三十にして立つ」。孔子の三十代は激動の十年で、内紛による国君・昭公の齊への亡命と

孔子自身の出奔、斉での就職活動と失敗、そして楽（音楽）との出会いなど、自国以外の世界に身を置いて、さらに見聞を広げると同時に、研究済みの学問の成果を世に問い、自らも積極的に実践してみようとしたのが、この壮年前期ではなかっただろうか。「三十にして立つ」とは、いよいよ自分の意思で、信ずる道を広める決意ができたことを示す言葉に聞こえます。

子曰わく、人能く道を弘む。道、人を弘むに非ず。（衛霊公第十五の二十九）

（先生が言われるには、その人があってこそ道を広めることができるのだ。始めから敷かれたレールがあるわけではない、と）

先ずは、その頃の隣国を含めた国情がどのような状態だったのか、かいつまんで説明しておく必要があります。簡にして要を得た「史記」・孔子世家をそっくり借用すると、「この時や、晉の平公は淫にして、六卿、権（力）を擅にし、東のかた諸侯を伐つ。楚の靈王は兵強く、中国を陵躐（凌ぎ侵す）す。齊は大にして魯に近し。魯は小弱なり。楚に付けば則ち晉怒り、晉に付けば則ち楚来たり伐ち、齊に備えざれば、則ち齊の師（軍隊）、魯を侵す。魯の昭公の二十年にして、孔子蓋し年三十なり」とあり、列国の状況が一目で彷彿します。若干補足しておきましょう。

大国である晉は、国主の平公が、紀元前五百三十二年に亡くなるまでの二十六年間に、庶民に重税をかけ、楼台や池を作ったりして平公が淫樂に耽ったため、政治は乱れ国運は既に傾いていました。代わって実権を握ったのが、卿大夫で、韓氏、趙氏、魏氏、范氏、中行氏、知氏の六卿でした。平公の後を継いだ昭公も六年後に亡くなり、頃公が即位しますが、弱体ぶりは加速します。そこへきて、周王室に相続の争いが起こり、晉の六卿が王室の混乱を鎮めて敬王を即位させるという事件があり、大国の威信は全く六卿の手によって支えられる始末です。やがてこの中から、韓氏、趙氏、魏氏の三卿が抜きん出て、晉国が事実上韓・趙・魏の三国に分かれます。（紀元前四百五十三年）

もう一方の大国・楚は、紀元前五百四十一年に靈王が即位し、始めは諸侯の盟主となって国威を奮いますが、至って尊大で、呉との戦いなど頻繁に人民を軍事に使役して怨まれ、公子の弃疾の詐術にあって餓死してしまいます。紀元前五百二十八年、弃疾が即位して平王となります。ところが平王も始めは善政を敷いたものの、太子・建の従事次官にそののかされ、建の妃に迎えた秦の公女を横取りしてしまう。太子・建は国外に亡命し、建の従事長であった伍奢は殺害されます。復讐の鬼と化した息子の伍子胥は呉の公子光（後の呉王・闔廬）に頼り、光の参謀として活躍し、光が即位するや、唐や蔡の兵を従えて遂に怨敵・楚を敗ります。（紀元前五百六年） 楚は最終的には、秦の始皇帝が天下を統一する直前に、秦によって滅ぼされました。

齊は景公と賢人宰相の晏子（安平仲、晏嬰）の時代です。晏子の輔弼により国運はかろうじて隆盛を保っていましたが、晉国同様、パフォーマンスだけの景公の下、田氏、鮑氏、高氏、欒氏の四家が権力を握り、特に私恩を売って人望のあった田氏が勢力を着々と伸ばしていました。晏子はこの中であって、前章で述べたように、景公の豪奢癖を諫めて内政の安定を謀り、晉や魯へ赴いては、外交を維持しました。この間、魯の内乱で昭公が亡命してきたのを匿い、孔子がそれに伴って出奔して齊に入ったり、大夫の陽虎が逃れてきたり、魯の定公の時に狹谷の会盟で孔子と駆け引きしたなど、魯に関係深い事件が相継ぎます。これらの概要は以下の魯国の国情で述べることにします。

紀元前五百年に晏子が死ぬと、景公の跡目相続問題が導火線となって齊は一挙に傾きます。そして四家のうち田氏が抜きん出て、遂に齊国を総て所有することになるのです。

孔子の母国・魯では、「史記」に「魯は小弱なり。楚に付けば則ち晉怒り、晉に付けば則ち楚来たり伐ち、齊に備えざれば、則ち齊の師（軍隊）魯を侵す」とあったように、周囲の列国から脅威を受けて戦々恐々としている時なのに、第二章冒頭で述べたように、齊の桓公の縁戚から分家したことから「三桓」と呼ばれる孟孫氏、叔孫氏、季孫氏という国家老たちが実権を握って君主を脅かしているという国内外受難の時代でした。

特にこの御三家の中では季氏が最有力で、宣公、成公、襄公、そして昭公にいたる四代の国君に亘って政権を握っていました。そしてその間、季氏は季文子、季武子と継いで、孔子の壮年期は、季平子が国政を牛耳っていました。昭公が快く思っているはずがありません。

たまたま、季平子が郕昭伯という大夫と、鬬鷄のイカサマ事件で紛争を引き起こします。季平子が鷄の羽根に目潰しの芥子を塗り、一方の郕氏が鷄に鉄爪をつけて相闘わせたが、季平子が敗れ、それを怒って、隣家である郕氏の邸宅内に、自分の宮室を建て増したり、境界のことで文句をつけたり、いやがらせ三昧です。その他あちこちから聞こえる「季子横暴なり」の訴えの声に、昭公は時機到来とばかりに、季平子討伐の兵を向けました。

ところが、孟孫氏、叔孫氏は、季平子がいなければ我らは無きも同然と考えて、季氏に加勢して昭公を逆襲したため、昭公は隣国の齊に亡命しました。孔子も昭公の後を追うようにして齊に赴きます。時に孔子は三十五歳前後でした。

なぜ孔子が昭公とともに齊に行ったのか。「史記・孔子世家」では、「孔子、齊に適き、高昭子（齊の太夫）の家臣となり、以て景公に通ぜんと欲す」とあります。魯国内の三桓の専横に嫌気を催して、伝え聞く賢人宰相・晏子のいる齊の実情を見聞し、高昭子のもとで寄食しながら、願わくは景公の下で蓄えた力を試してみたい、と新しいチャンスに賭けたのかもしれませんが。仕官はならなかったものの、孔子にとっては貴重な収穫のある旅でした。

先ず彼を驚かせたのは、齊で初めて聞いた、舜が作ったといわれる「韶」という音楽の素晴らしさでした。孔子は「美を尽くせり、又、善を尽くせり」（八佾第三の二十五）と、

感嘆の声を発しました。

子、齊に在して韶^{しやう}を聞く。三月（何ヶ月も）肉の味を知らず。曰わく、罔らざりき、
樂を為すことの斯^{こゝろ}に至らんとは。（述而第七の十三）

（先生が齊に在留中、「韶」の音楽を聞いて習い、感動して、何ヶ月も好きな肉を忘れる
ほどだった。先生が言われるには、いやぁ思ってもみなかったよ、音楽がこんなに素晴ら
しいとは、と）

郷党篇は、孔子の日常生活や人となりが色々述べられていて、とても面白い篇ですが、
そこに孔子の好物が載っています。それによると、白米、膾^{なます}、魚肉、酒で、「肉はたくさん
食べるが、主食の飯の量を超えないようにし、酒はいくらでも飲むが、乱れない」とあり
ます。その大好きな肉の味を忘れるほど熱中して、「韶」の音楽を聞き、練習した、という
のです。それほど没頭すれば、一家言^{いっかげん}（独自の見解）も発するようになるのでしょう。後
日魯に帰った孔子は、音楽の専門家を相手に滔滔と音楽論を語っています。

子、魯の大師（音楽官長）に樂を語りて曰わく、「音楽は私にも分かります。（起承転結
でいえば、）出だしは翕如^{きゆうじょ}、承けて純如^{じゆんじょ}、転じて皦如^{きやうじょ}、結びは繹如^{えきじょ}で、それで終わりです
ね」と。（八佾第三の二十三） 注：宮崎市定「現代語訳論語」（岩波現代文庫）を参照

孔子の勉強ぶりは、先述の「美を尽くす」や、「礼を尽くす」（八佾篇）、「力を尽くす」（泰
伯篇）に見られるように、何事も「尽くす＝極め尽くす」まで徹底してやるのが流儀です。
歌を合唱するときもそうでした。

先生は、人と歌って相手がうまければ、必ずそれを繰り返させ、十分マスターしてから合
唱した。（述而第七の三十一）

音楽の収穫はあったものの、景公との面談は、第二章の晏平仲（晏子）の項で述べたよ
うに、「君君 臣臣 父父 子子」などの政治問答を幾つか交わしただけで、晏子の反対に
もあったりして、景公の「吾老いたり。用ふること能はず^{あた}」の最終通告を以て、孔子は遂
に齊を去り魯に帰りました。

齊に亡命した昭公は、景公が後ろ盾としてなかなか御輿をあげてくれないので、二、三
年後に晉に行き、魯に戻るための援助を請いました。だが、季平子が晉の六卿に賄賂を贈
り、晉君（頃公）への進言を工作したため、願いは届かず、乾侯という所で時機を待ちま
す。再三の援助依頼が聞かれ、昭公を魯に帰そうと、頃公が季平子呼び寄せたところ、
季平子はボロボロの平民服をまとい、裸足の囚人姿で偽装して六卿に請い、謝罪しました。
六卿への賄賂と惨めな身なりの季平子に同情して、晉国は、魯への出兵を取りやめてしま

います。紀元前五百十年、亡命してから七年後、昭公は晉で客死してしまいました。そして魯の人々が即位させたのが昭公の弟の定公^{ていこう}です。孔子は既に四十歳を回っていました。

【四十にして迷わず 執政のチャンスに餓える孔子】

「四十にして迷わず」。実は孔子が一番迷い苦しんだのがこの四十代ではなかったか、と思われまふ。そして迷った後の壮年後期の孔子像を彷彿させる形容が、「史記」・孔子世家にある次の記述です。 「(陽虎^{ようこ}、公山不狃^{こうざんふちゅう}、季氏などの)陪臣^{へいしん}が国政^{こくせい}を執る。是^{こゝ}を以て、魯、大夫以下、皆僭^{せん}して(僭越^{せんえつ}にも王侯^{おうこう}に倣^{なら}って)正道より離る。故に孔子仕えず、退きて詩書礼楽を修む。弟子いよいよ多く、遠方より至り、業を受けざるものなし」

定公が即位して五年もすると、策謀家の季平子が亡くなります。そして息子の季桓子^{きかんし}が後を継ぎます。そこを狙って季平子の陪臣の陽虎^{ようこ}(陽貨)と公山不狃^{こうざんふちゅう}が、斉の後ろ盾^{きかんし}で季桓子を抑えて実権を握ります。陽虎は「三桓」の嫡子たちを総て皆殺しにして、自分の息のかかった者の庶子たちに代わらせようと謀っていました。そして人望のない自分たちの後光役として担ぎ出そうと、孔子に白羽の矢を立て、盛んに勧誘します。孔子は逃げたり、触手を動かしたり迷いに迷います。

陽虎^{ようこ}(陽貨^{ようか})が孔子に会いたいと思ったが、孔子は会わなかった。そこで孔子に豚を贈った。孔子はお礼を言うに当って、陽虎の留守中^{留守中}にと思って出かけたが、途中でばったり会ってしまった。陽虎曰く「ぜひ来て欲しい。一緒に語ってみたいのだ。そもそも貴公は、宝を胸に抱いていながら国が乱れているのを救おうとされない。仁というべきだろうか。無論いえない。政事がお好きなのに度々チャンスを逃しておられる。知といえるだろうか。無論いえない。月日は過ぎ行くもの、年は待ってくれない。どうだろう」と。孔子曰く、「分かり申した。私も今にお仕えいたしましょう」と。(陽貨第十七の一)

そう答えたものの、孔子は結局陽虎には仕えませんでした。しかし、魯の国は、国君あって傀儡^{かいらい}(操り人形)の如く、季氏一族と陽虎等の権力闘争、大夫から下役人まで、皆な上を恐れぬ僂若無人^{ろうじやくぶじん}ぶり。周室でのみ許された天子の舞が大夫の家室でも平気でなされている。礼の秩序は喪失して正道無きが如し。孔子の胸は疼く、政治をやりたい。

しかし、「孔子、道に循^{したが}ふこと久しきにわたり、温温^{おんおん}たれど(蘊蓄があるのに)、試みる所無く、能く己を用ふるものなし」と、「史記」・孔子世家に記述されているように、どこからもお声がかからない。

一方で、第一期の弟子たちも入門して、政治談議をする場が増えてきました。子路^{しろう}、曾點^{そうてん}、子貢^{しこう}、冉伯牛^{ぜんはくぎゅう}、閔子騫^{びんしけん}、冉求^{ぜんきゅう}、仲弓^{ちゅうきゅう}、宰我^{さいが}、顔淵^{がんえん}などです。特に政治に口を出したがるのが子路。チャンス到来の無いもどかしさを、つい、彼ら相手に口に出して嘆くこの頃

の孔子でした。

子曰わく、^{いやし}苟くも我を用うる者あらば、^{きげつ}期月（一年）のみにして可ならん。三年にして成すこと有らん。（子路第十三の十）

（先生が言われるには、もし私に政治を任せてくれる者がいたら、一年で見込みをつける。三年もあれば立派に仕上げてみせるのだが、と）

遂に孔子は、我慢しきれずに、陽虎と手を組んで季氏に反旗を翻した^{こうやざんふちゅう}公山不狃の誘いに乗ろうとして、子路にたしなめられる始末です。

^{こうやざんふちゅう}公山不狃（不狃）が^ひ費の町を占拠して反乱を興した。彼が孔子を招いたので孔子は行こうとした。子路が不満顔で言った。「行く必要はないでしょう。何で公山氏のところなどへ行かれるのですか」と。子曰わく、「そもそも私を招くからには、無意味じゃないだろう。もし私を用いてくれるなら、周が東に遷都したように魯を再興してみせるのだが」と。（陽貨第十七の五）

もう少し後と思われる「^{ひつぎつ}怫髀の乱」の時にも、孔子は招きに応じようとしてしました。子路が又止めて言うには、「かつて先生から、自らその身に背いて善くないことをする者に君子は仲間入りしないものだ、と伺っています。怫髀は^{ちゅうぼう}中牟の町に拠って謀叛を起こしています。なぜ先生はそこへ行かれるのですか」と。そうしたら孔子は次のように弁解がましく言いました。

こういう言葉があるじゃないか。「堅しと曰わざらんや、磨すれども^{うすり}磷がず。白しと曰わざらんや、涅すれど^{でつ}緇^{くろ}まず」と。私は^{ほうか}匏瓜（にがうり）ではない。ぶら下がったまま、人に食われないでおられようか、と。（陽貨第十七の七）

「堅しと曰わざらんや、磨すれども磷がず。白しと曰わざらんや、涅すれど緇まず」というのは、「硬いといわずにおれようか、研磨しても薄くならないものは。白いといわないだろうか、黒土でこねても^{くろ}緇（黒）まないのは」という意味で、要するに、私はしっかりしているから、怫髀に研磨されようが黒土でこねまわされようが自分の信念を変えないから大丈夫だ、の意です。結局孔子は、^{こうやざんふちゅう}公山不狃の誘いにも怫髀の誘いにも乗りませんでした。

「四十にして惑わず」と言った孔子は、五十歳に近づくにつれ、明らかに焦っていました。何としても執政の座に就いて、自分の理想とする政治をやらせてもらいたい。今、君主は名のみにして、「三桓」や陪臣が果てしない権力闘争を繰り返しているだけだ。^{とたん}塗炭の苦しみ（「書経」にある言葉で、泥にまみれ、火に焼かれるほどの苦痛）に喘いでいるのは

庶民たち。政治を整え、礼に適った秩序ある社会を復興し、堯・舜・禹・湯王・武王の御世のごとくに復古できないものか。力及ばずながら、伊尹や周公、或は鄭の子産や齊の管仲、晏子のような宰相になって善政を敷き、国威を復権したい。私もそう若くない、何としても実践の場が欲しい、と。

では、政界への出馬をそれほどまでに希求したはずの孔子が、なぜ後年になって「**四十にして惑わず**」と言ったのでしょうか。結論を先に述べれば、前掲の「史記」に記載された、「故に孔子仕えず、退きて詩書礼楽を修む。弟子いよいよ多く、遠方より至り、業を受けざるものなし」にあるように思えます。

職業としての「孔子学園」に、頼もしい弟子たちが入門してきて、若かりし頃志した、「学問研究を教授して人を育てる」という目的が着々と実を結びはじめたからだろうと思います。彼らが諸侯に仕えて孔子の教えを伝えていってくれる。自分にとっては、風車が風を待って回りだすように、今は風待ちの時。じっくり本来の詩書礼楽を修めて以て彼らを教え、時を待とう。時々抑えきれぬ政治への願望を、弟子を教育するエネルギーに振り向けることにより、孔子は自分の天分が初志を貫徹することにある、と改めて思い定めた。それが「**四十にして惑わず**」の心情ではなかったか。

「史記」・仲尼弟子列伝によれば、孔子と弟子たちの年齢差は、子路が九歳、閔子騫が十五歳、子貢・冉求・冉雍・顔回等が約三十歳前後で、孔子の四十代後半には、時あたかも彼らが成年に或は壮年に差し掛かってきた年頃であったのです。

子曰わく、後世畏るべし。焉んぞ来者の今に如かざるを知らんや。

（先生が言われるには、青少年は恐るべき存在だ。彼らが現在の我々大人に及ばないなどと、どうして分かるものか。そんなことは分からない、と。（子罕第九の二十三）